

解説ハリストス教信仰 (II)

木村 真之介

2026.1.3

概要

せいきょうかい
正教会の歴史について。

ハリストス教の歴史はハリストスの降誕から始まるのではありません。神が世界を創造したときから始まります。

聖なる教会の歴史と教義に関する解説は分けるよりは一緒にしてしまう方がよろしかろうと考え、この章の特に「七つの全地公会」のセクションでは、歴史と教義について同時に解説をします。

この章では厳密に正教会の翻訳を適用できないので一般的な表記を併用します。



三成聖者、左から聖大ワシリイ、金口イオアン、神学者グリゴリイ

目次

0.1	聖なる教会の歴史と教義	3
0.2	七つの公会議	8
0.3	五大総主教制	18
0.4	カルケドン公会議での教会分裂	18
0.5	東西教会の分裂	19
0.6	世界への拡大	20
0.7	ロシア正教会の歴史	25
0.8	日本への宣教	32
0.9	おわりに	36

0.1 聖なる教会の歴史と教義

0.1.1 旧約聖書の時代

旧約聖書の時代、イイスス・ハリストスの降誕よりも前の時代のことを旧約時代といいます。

はじめに天地の創造、人の陥罪、人類最初の殺人があり、やがてノイの大洪水がありました。^{*1}

^{*1} これらの天地の創造からノイの大洪水のあたりについては正確な年代がわかりません。また、どこまで地質学的に対応付けできるかも定かではありません。筆者は創造科学の

紀元前 2000 ~ 1700 年頃、神に義と認められ子孫の繁栄と救いを約束されたアブラハム^{アブラム}を太祖としたイサアク^{イサク}、イアコフ^{ヤコブ}の系統に連なるイスラエル民の誕生。

紀元前 17 世紀頃のエジプト^{エジプト}への集団移住。

紀元前 13 世紀頃の聖預言者モイセイ^{モーセ}はイスライリ民を率いてエジプトを出て^{*2}約束の土地、パレスチナ地方を目指します。その過程でモイセイは神からイスライリ民のための律法が与えられます。

紀元前 13 ~ 10 世紀頃はイスライリに王がない時代、十二部族連合、士師の時代です。

紀元前 11 ~ 10 世紀頃に現れた聖王預言者ダヴィド^{ダビデ}によるエウレイ^{ヘブライ}の王国の建国。おそらく BC1003 ~ 1025 年頃。

エウレイ王国は紀元前 10 世紀中期に即位したソロモン王の時代に最盛期を迎えます。

BC926 年にエウレイ王国はイスライリ王国とイウダ王国に分裂、紀元前 8 世紀下旬にイスライリ王国は滅亡。

BC586 年にネブカドネザル王の新バビロニア王国によるイウダ王国の滅亡そしてイウデヤ人達をバビロン^{バビロン}へ強制移住する政策すなわちバビロン捕囚。

BC538 年アケメネス朝ペルシアが新バビロニア王国を滅ぼしたことによるイウデヤ人達のバビロン捕囚からの解放。そしてイエルサリム神殿の再建と復興の時代。ペルシア支配下での緩やかな自治が認められていた時代です。

BC330 年頃にはペルシアがアレキサンダー大王によって滅ぼされ、中近

類の創造論や ID 論 (インテリジェント・デザイン仮説) については否定的な考え方をしています。また神は創造の過程で進化という方法を探ったという説も懷疑的です。あくまでも旧約聖書の創世記の冒頭の記述に関しては「これによって何が啓示されているか」に注意を向けるべきだと考えています。

*2 出エジプト

東一帯はエルリン人達の支配に入ります。その後、何度か支配者が変わりますが、紀元前2~1世紀、セレウコス朝時代、イウデヤの宗教を否定しヘレンズム文化とその価値観を押し付ける政策が取られたためマッカウェイの反乱が起こりイウデヤ人による王国(ハスモン朝)が誕生します。

しかしこの王朝も長くは続かず、BC40年頃にはローマ人達の支配に入り、旧約の時代も終わりを迎えます。

旧約時代は各時代に神からイウデヤ人達に与えられた聖預言者達がハリストスについての預言を行っていた時代です。

0.1.2 新約聖書の時代

およそ2000年前、ハリストスの降誕以降の時代を新約時代といいます。すなわち現代は新約時代です。ここでは新約聖書の時代について説明します。まず、ハリストスがダヴィドの子アウラアムの子として処女から生まれるという預言が旧約の聖預言者イザヤによってなされました。その預言の成就として神の母すなわち生神女マリヤは聖神^{せいしん}によってイイススを懷妊し生みます。^{*3}

ハリストスであり神であるイイススはおよそ30歳の時に公に教え始めます。この時から十字架に至るまでの生涯を公生涯といいます。

十字架にかけられ死んで葬られ復活し天に昇るのが紀元後30年頃と推測されます。^{*4}

イイススは弟子達に多くの奇蹟を通して教えます。すなわちイイススが神

^{*3} もともと現代の暦はハリストスが降誕した年を基準に定められたのですが、後の研究では降誕年が正確にはわからず、BC4年とかBC7年頃とか諸説あります。

^{*4} イイススの年齢に関して、33歳で十字架に釘打たれたという説が有力ですが、50歳よりすこし前くらいだったかもしれないという説もあるのです。ヨハネ伝8:57『そこでユダヤ人たちはイエスに言った、「あなたはまだ五十にもならないのに、アブラハムを見たのか。』』という箇所が50歳にはなっていないが50歳近い年齢だったのではないかという説の根拠です。

の子であること、死に渡されて三日目に復活することを教えます。そして実際に十字架にかけられ、このとき、栄光を受けます。死んで葬られて三日目に復活し、弟子達の前にしばしば姿を現し教え、全世界にハリストスの教えを伝えるように、信じること、洗礼を施すこと、聖神[。]を受けることについて遺言し天に昇りました。

イイススの約束通り使徒達に聖神[。]が降り、宣教する能力を与えられ、教会が建立され、全世界に向けて宣教が行われるようになりました。このイイ
スス・ハリストスの言行録が福音書として新約聖書に含まれています。

イイススが天に昇った後、新約聖書によれば、1世紀頃の時代には、ローマ帝国の地中海世界のいくつかの都市に初代教会のコミュニティが成立していましたことがわかります。聖使徒パウェルはこれらの教会に対して多くの手紙を書いており、その手紙が新約聖書に含まれています。

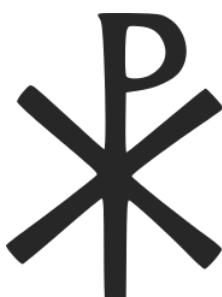
0.1.3 迫害時代

1世紀から4世紀初頭にかけて、^{クリスチヤン}ハリストイアニン達は迫害を受けます。当時のローマ帝国では皇帝を神としていました。そのため皇帝を礼拝しない者は迫害されました。^{クリスチヤン}ハリストスを信じるハリストイアニン達は唯一の神を信じていたため皇帝への礼拝をしませんでした。そのためハリストイアニンであることが発覚すると逮捕され裁判においてハリストス教を棄て皇帝の像に拝することが要求されました。様々な拷問を受けて棄教しない者は処刑されました。棄教しなかった者達は致命者と呼ばれ聖人として記憶されるようになります。また、ハリストイアニンはハリストスの体と血を飲食しているということから人の血肉を食べているとか凶悪な不品行な人々であるといった様々な誤解をされ異教徒からは酷く憎まれていました。2世紀の聖人イウスチンはハリストイアニン達は決して悪い人たちではないと反論し護教活動を行いますが、最終的には陰謀によって殺されます。ある司祭の意見では^{キリスト}ハリストス教が迫害されたのは反宗教的な宗教であったためです。宗教とは

よいことを行うことを推奨するのが普通です。しかしハリストス教において最初にパラダイスに入れられたのは人を何人殺したかわからない重罪人であったとされています。^{*5}これが反宗教的とみなされた理由でした。

0.1.4 ローマ帝国での公認と国教化

4世紀。多くの迫害に耐え、ハリストス教はローマ帝国内部で非常に多くの信徒を獲得するに至りました。もはや公認せざるを得ない状況となりました。ついに313年、ミラノ勅令によりハリストス教は公認され迫害の時代を終えることになります。また、皇帝コンスタンチン大帝は政敵との戦いに先立ち、空に「XP これにて勝てり」と書かれているのを見て、ローマの軍神マルスに替えてハリストスを意味するエルリン語のアルファベットであるX(キー)とP(ロー)を組み合わせたラバルムを旗印として戦い、勝利したという伝承があります。そしてハリストス教は、392年にローマ帝国の国教となります。



ラバルム

^{*5} イエスは言われた、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。(ルカ 23:43 口語訳) の箇所

0.2 七つの公会議

迫害の時代が終わり、ハリストス教はコンスタンティノポリスを中心に黄金時代を迎えます。ミラノ勅令によりハリストス教が公認され、迫害の心配もなくなると改めてハリストス教についての公な議論がなされるようになります。しかしこれは同時に教会の大分裂を起こしかねない深刻な混乱した状況を招きました。そこで時の皇帝は混乱を収拾すべくたびたび公会議を招集するようになります。ここでは最も重要とされる七つの公会議について説明します。

カリストス・ウェア主教によれば、公会議とは次のようなものでした。

『全地公会議は「三位一体」と「藉身」というキリスト教信仰の基本的な教義についての教えを最終的に確定した。すべてのキリスト教徒はこれらを人間の理解や言語を超えた「神秘」と見なすことで一致している。公会議では主教たちはこれらについての定義を確定したが、彼らは決して神秘を説明することを意図したのではない。神秘について間違った仕方で語ったり考えたりすることを排除しようとしたに過ぎない。人々が誤りや異端に陥らないために彼らは神秘の周りに柵を巡らした。それだけのことである。』

——「正教会入門」(ティモシー・ウェア、松島雄一監訳、新教出版社)32 ページ「初めの六回の公会議 (325~681) より抜粋

ここでは「正教会入門」(新教出版社)および「キリスト教の歴史 3 - 東方正教会・東方諸教会」(廣岡正久、山川出版社)を頼りに、第一全地公会から順を追って見て行きましょう。

0.2.1 第一全地公会

325年にニケアで開催されたこの会議では、アリウス主義が主な議題でした。アリウスあるいはアレイオス（正教会訳ではアリイ）によってとねえられた異端として知られています。アリウス主義はおよそ「ハリストスは神に劣る被造物に過ぎない」ものとしました。これに対してアファナシイ（アタナシオス）は神とその子ハリストスの同質性を主張しました。

教父たちはヨハネによる福音書の次の箇所について、大胆に、人間は神成（テオシス）されなければならないと考えていました。

「わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります。」（ヨハネによる福音書 17:22-23 口語訳）

正教会訳

またなんざ われ あた えい われかれら あた われら いつ ごと
亦 爾 が我に與へし榮を、我彼等に與へたり、我等の一なるが如く、
かれら いつ な ため われ かれら あ なんぢ われ あ かれら
彼等の一と爲らん爲なり。我は彼等に在り、爾は我に在り、彼等をし
て一に成全せしめん爲、且世が爾の我を遣し、又我を愛する如く、
かれら あい し ため
彼等を愛することを知らん爲なり。

即ち、人が神となること、「神成」（神化、テオシス）が可能であるならば、救い主もまた完全に神であり人である必要があります。なぜなら神だけが人間を救えるのだから、ハリストスが人を救えるならば、ハリストスは神です。ハリストスは「半神半人」や「優れた被造物」に過ぎないというのでは

なく、「わたしは、有って有る者」^{*6}と言われた神と同じ意味で神であるというのです。このような理論でアリイの説は退けられたのです。

0.2.2 第二全地公会

325年の第一全地公会に続き、381年にコンスタンティノポリスで開催されたこの会議でも、ハリストスの神性に関する議論が続きました。この会議ではアリウス主義、アポリナリオス主義、サベリウス主義、そして聖神[°]に関する議論が行われました。三位一体説、至聖三者の理論はこの時に確認されます。これはカッパドキアの三教父として知られる、聖大ワシリイ、ナジアンゾスのグリゴリイ、ニッサのグリゴリイの説が正しいと認められたということです。すなわち「神=父」「神=子(ハリストス)」及び「神=聖神[°]」は一体にして別れざる三者、同本質の神であることが確認されたのです。その結果として、現在、私達が信仰告白でとなえている「ニケア・コンスタンティノポリ信経」が採択されたのです。

なお、アポリナリオスの説とは、4世紀のラオディキアのアポリナリオスによってとなえられた説です。すなちハリストスは人間の肉体を持つつ、聖なるたましいとして神がやどっていたのだという説です。今日でも初学者が陥りやすい誤りで、完全な神であり完全な人であるハリストスの性質を毀損するものとして排斥されました。^{*7}

「正教要理」(トマス・ホプコ著、ダヴィド水口優明訳、西日本主教教区教務部発行)にもアポリナリオス異端について触れられています。つまり、イイススの中にある神[°]は、神・父、神・聖神[°]と共に永遠に存在している神・

^{*6} 預言者モイセイが『神の名』を尋ねられた時に何と答えたらよいかを神に問いかけた際の神のことば。(出エジプト3:14 神はモーセに言われた。「私はいる、という者である。」そして言われた。「このようにイスラエルの人々に言いなさい。『私はいる』という方が、私をあなたがたに遣わされたのだと。」)

^{*7} Apollinarism: <https://en.m.wikipedia.org/wiki/Apollinarism> (2026年1月閲覧)

子としての神[°] であって、現実の人間としての魂や心や神[°] は持っていないという教えです。神殿に臨在するかのように、人間としての肉体の中に神が臨在されただけであるというわけです。^{*8}

サベリウス主義とは、3世紀の司祭、神学者であるサベリウスによってとなえられた説です。彼は主にローマで活躍しましたが、恐らくは北アフリカのリビアの出身と思われます。その説は「神ご自身は一つであって、異なった形においてこの世に現れただけである」というものでした。これは様態的モナルキア主義ともいいます。^{*9}

なお、様態的モナルキアの他に動態的モナルキア主義と呼ばれるものもあります。これはサベリウス主義とは異なりますが似た論です。養子論とも呼ばれ、神は一つであって、神の思いや言葉が「子」と呼ばれる、神の生命や行動といった活動が「聖神^{せいしん}」と呼ばれるに過ぎない。つまり「子」も「聖神^{せいしん}」も神の働きに関する各側面の名称に過ぎないという説です。^{*10}

0.2.3 第三全地公会

431年にエフェスで開催されたこの会議での主な議題は、ネストリウス主義、生神女（テオトコス）、及びペラギウス主義でした。

ネストリウス主義は5世紀のコンスタンティノポリス大主教ネストリウス、あるいはネストリオス、ネストリイがとなえた説で、神母論争と呼ばれるものを引き起こしました。これはハリストスの神性と人性の結びつきに反対するものでした。^{*11}すなわちハリストスを生んだマリヤの称号に、「神の母」（テオトコス）というのはふさわしくない、せいぜい「ハリストスの母」^{ハリストコス}というべきである。といってマリヤを生神女（テオトコス）と呼ぶことを拒

^{*8} 「正教要理」60ページ、「藉身」、「全地公会」の「13」の項目を参照

^{*9} 正教要理 112ページ III 至聖三者 間違った至聖三者の教義 3 を参照

^{*10} 正教要理 112ページ III 至聖三者 間違った至聖三者の教義 4 を参照

^{*11} 「キリスト教の歴史 3」廣岡正久著 16ページ

絶しました。彼はマリヤはハリストスの人間部分の母であるべきで神の部分の母ではないと主張したのです。

これに対しアレクサンドリアの聖キリールは「マリヤは神の母である、なぜなら肉体となった神の言葉を産んだからである」と主張します。イオアン伝の 1:14 から導き出された回答でした。

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。」(ヨハネによる福音書 1:14 口語訳)

正教会訳

言葉は肉^{しば}體^{にくたい}と成^なりて、我等^{われら}の^{うち}に居^ゐりたり、恩寵^{おんちょう}と真實^{しんじつ}と^みに満^みてられたり。我等^{われらかれ}彼^{くわうえい}の光榮^みを見たり、父^ちの獨生子^{どくせいし}の如^{ごと}き光榮^{くわうえい}なり。

すなわち分割できない単一の位格「神にして人である位格」がハリストスであるというのです。そして「生神女」^{しょうしんじょ}という呼称はハリストスの位格の統一を守るものでした。この称号の否定は藉身したハリストスの性質を二つに分割し、神と人との間の架け橋を破壊するものでした。これは単なる称号の問題ではなく、救済に関する信仰の問題であり、至聖三者に用いる「同一本質」(ホモウシオス) ^{しょうしんじょ}という語と同様に、神の位格の統一性が、「生神女」(テオトコス) ^{しょうしんじょ}という語に含まれているということが明らかになったということです。^{*12}

ペラギウス主義について筆者は十分な資料を得られませんでしたのでここでは深く追求しませんが、およそ次のような説でした。

原罪は人類を穢しておらず、神の恩寵なしに、「罪深い思想/滅びにいたる意志/滅びる運命に導かずにはいられない人間の意志/人間を死に至らしめる思想」は(つまり仮に原罪があっても人間は) 未だ善か悪かを選択すること

*¹² この解説は「正教会入門」ティモシー・ウェア著、38 ページを参考にしました。

ができます。したがって、罪のない幼児は洗礼を必要としないし、罪をおかさない人は永遠に生きるはずです。人間の現世での努力によって原罪の影響なく永生を得ることができます。

これに対しアウグスティヌスは神の恩寵なしに人間は善を選択し得ないと論駁します。^{るんぱく} 神の恩寵によらず、己の現世的な努力だけで生命に到るとは考えませんのでペラギウスの説は退けられました。なお、オーソドックスの教会ではアウグスティヌス的な原罪理解を採用していないため、幼児は罪を知らない者として考えますが幼児であってもなるべく早く神の恩寵に浴すべきであると信じて幼児洗礼を行います。洗礼機密は聖なる機密であって単なる罪の洗い流し以上の意味があります。幼児洗礼は否定されませんし、子供に洗礼を施さない親は定罪せられます。

0.2.4 第四全地公会

第四全地公会（451年）に先立つ449年、エフェスで開催された会議^{*13}において、アレクサンドリアのキリールの後継者ディオスコロスは「ハリストスにはただ一つの本性しかない」、藉身後は「神言葉の藉身した一つの本性」しかないと主張しました。これは単性論という異端として今日知られています。背景にはアレクサンドリア学派とアンティオキア学派との対立がありました。どちらもハリストスが至聖三者の一位格であり、完全な神であることは認めていましたが、神であることと人であることの結合の理屈が噛み合いませんでした。この盗賊会議と呼ばれたエフェスの会議は広くは認められず、2年後のカルケドン（カルカドン）^{カルフアゲン}（ハルキドン）で開催された会議が第四全地公会として認めされました。単性論は否定され、神子の性質は「二つの本性において混合なく、変化なく」「唯一かつ同一の子、・・・分割なく、分離なく」^{*14}と確認されました。

*13 エフェソスの強盗会議、盗賊会議などと呼ばれています。

*14 「正教会入門」40ページ。

0.2.5 第五全地公会

553年にコンスタンティノポリスで開催されたこの会議では、再びネストリウス主義と单性論について議論されました。なお、万物救済論が否定されたのもこの会議でした。^{*15}

0.2.6 第六全地公会

680～681年にかけてコンスタンティノポリスで開催されたこの会議では、单意論が議論されました。ハリストスの神性と人性の関係についての議論です。これは单性論と似た考え方です。すなわち神子は、人間の肉体を持ち、意志において神であるというものでした。これは藉身した神子の性質、完全な神でありながら完全な、意志をも含めて、完全な人であるハリストスの性質を否定し、その結果、私達の救いが及ぶのも肉体部分のみになると理解されます。正統信仰は肉体のみならず意志においても人であり、かつ完全に神であるハリストスは、二つの本性を持っているならば二つの意志を持っていなくてはならないとし、ハリストスの人性の完全性を否定する单意論を拒否しました。ハリストスには神の意志と同時に人間の意志も持ち合わせていなければならぬのです。^{*16}

0.2.7 第七全地公会

787年にニケアで開催されたこの会議は聖像破壊運動（イコノクラスマ）について議論されました。聖像は偶像なのかという議論でしたが、結論をい

*15 「私たちはどのように救われるか」45ページ。3世紀のオリゲンの万物救済論は否定されたがニッサのグレゴリイもまた「悪魔も結果的に救われるという希望を抱きました」。カリストス・ウェア主教によれば、救いは機密的でありはかり知れないものです。

*16 カリストス・ウェア「正教会入門」43ページ。

えばイコンは偶像ではありません。偶像とは神でないものを铸造したり彫ったり描いたりしたもの、すなわち神でないものを神以上に拝することです。たとえばハリストスのイコンは神であるハリストスを描いています。^{*17}ハリストスは藉身した完全な神でありながら完全に人でもあります。姿のない神を描くことは不可能だと考えられるかもしれません、ハリストス神は人となつて描くことが可能になったということです。それでは聖人たちのイコンはどうでしょうか。聖人は人ですが、創世記のはじめ^{*18}に書かれている通り、神は人間を神の似姿、肖と像にしたがっておつくりになりました。すなわち、私達ひとりひとりが神の似姿である。神のイコンであるという理解が得られました。

これは単なる宗教画の可否を問うものではなく、藉身した神、物質的な全世界の救済に関する議論だったのです。^{*19}

聖像破壊運動はユダヤ教やイスラム教の影響を受けていた可能性はありますが、ビザンツ帝国内部の「純正主義」(ピーリタリズム)的な見解からイコンを攻撃する流れがありました。この流れは726年にビザンツ皇帝レオ三世が聖像禁止令を発布することにつながります。そして公会議の結果をうけても、聖像破壊運動は簡単には收まりませんでした。最終的には皇后テオドラ^{テオドラ}が843年に聖像破壊運動を終息させるまで続きます。そして、このイコンの勝利は、今日の私達の教会にも受け継がれており、現在では大齋第一週目の主日を「正教勝利の主日」として記憶し続けています。

聖像破壊運動への反論で活躍したダマスク^{ダマスクス}の聖イオアンによれば「イコンは勝利の歌」なのです。

イコンとは藉身した神への信仰を表明するものだったのです。

しかしながら、描かれたイコンは実際に、肉体で、目で見ることが可能になりましたが、ただ見るだけであれば芸術品を鑑賞するのと大差ないかもし

*17 日本正教会の用語の慣例では「描く」は「かく」と読むことが多いです。

*18 創世記 1-26

*19 カリストス・ウェア「正教会入門」48 ページ。

れません。大切なのは、イコンに描かれた原像を見ることです。

「像をかたどれば、一般に、目に見えるようになるけれども、神性の
眞の象^{ぞう}は無体である。預言者、その他全ての神象の啓示を受けた者は
己れ自身の^{からだ}体の目で見たのではない。他ならぬ心の目（智恵）で見た
のである。」^{*20}

*20 「正教会のイコン観」『聖像』聖イオアン・ダマスキン述、明治 15 年ペートル小野訳、府主教ダニイル編集（1984 年 2 月）2007 年 10 月 26 日（再版）7 ページ。

表 1: 七つの全地公会議の一覧

#	開催場所	年	主宰者	司会者・議長	人数
	議題				
第一	第一ニケア	325	コンスタンチン大帝	コルドバの主教ホセウス	318
	アリウス主義、バスハの日取、主日およびバスハから五旬祭に至るまでの跪きの禁止、異端者による洗礼の有効性、信仰を失ったハリストニアニンについて、その他雑多な事。				
第二	第一コンスタンティノポリス	381	皇帝テオドシウス一世	アレクサンドリアのティモフェイ、アンティオキアのメルティウス、ナジアンゾスのグリゴリイ、コンスタンティノポリスのネクタリオス。	150
	アリウス主義、アポリナリオス主義、サベリウス主義、聖神 [°] 、メルティウスの後継者。				
第三	エフェス	431	皇帝テオドシウス二世	アレクサンドリアのキリール	200 ~ 250
	ネストリウス主義、生神女、ペラギウス主義。				
第四	カルケドン	451	皇帝マルキアヌス	執政官アナトリウスに率いられた政府官僚、元老院議員。	520
	449 年の第二エフェス公会議についての判断、アレクサンドリアの主教ディオスコロスによる違法な主張について、ハリストスの神性と人性の関係に関して、他の主教達や見解で異なる多くの論争を引き起こした。				
第五	第二コンスタンティノポリス	553	皇帝ユスティニアヌス一世	コンスタンティノポリスのエウスティウス	152
	ネストリウス主義、単性論。				
第六	第三コンスタンティノポリス	680 ~ 681	皇帝コンスタンチン四世	コンスタンティノポリスの総主教ゲオルギイ一世	300
	単意論、イイススの人性と神性と意志の関係について。				
第七	第二ニケア	787	皇帝コンスタンチン六世、皇后イリーナ(摂政として)	コンスタンティノポリスの総主教タラシイ、教皇ハドリアヌス一世の特使等	350
	聖像破壊運動				

出典: First seven ecumenical councils(en.wikipedia)

[\(2019 年 6 月時点\)](https://en.m.wikipedia.org/wiki/First_seven_ecumenical_councils)

0.3 五大総主教制

古代の五大総主教の序列は第二全地公会で決定されました。即ちローマを筆頭とし、コンスタンティノポリス、アレクサンドリア、アンティオキア、そしてイエルサリムの 5 つ地域をそれぞれの総主教が治めるという形態です。

0.4 カルケドン公会議での教会分裂

第二全地公会において 5 つの教会の序列が決まり、コンスタンティノポリスはローマに次ぐ第二位であることが確認されましたが、これはローマとアレクサンドリアの教会の権威への挑戦と受け取られます。長くローマ帝国の首都であったローマと新ローマを名乗るコンスタンティノポリスの権威争いだけでなく、東方世界では第一の権威を誇っていたアレクサンドリアとコンスタンティノポリスの権威争いへと発展します。アレクサンドリアとの権威争いは最終的には 451 年の第四全地公会（カルケドン公会議）においてアレクサンドリア教会が非カルケドン派として分裂・分離することになります。

カルケドン公会議の結果を受け入れた教会をカルケドン派、受け入れなかった教会を非カルケドン派とよんで区別します。

結果的にアレクサンドリアの教会、アンティオキアの教会、イエルサリムの教会ではそれぞれカルケドン公会議を受け入れないグループと受け入れるグループに分裂してしまいます。

非カルケドン派教会として大きなグループが、アレクサンドリアの教会の系統に属する現在のコプト正教会とアンティオキアの教会の系統に属する現在のシリア正教会といった教会があります。

カルケドン公会議を受け入れなかったのが非カルケドン派のグループですが、ここに 431 年の第三全地公会（エフェス公会議）で排斥されたネストリウス派の系統に含まれるアッシリア東方教会などを含めて「非カルケドン

派」または「東方諸教会」などという場合があります。

0.5 東西教会の分裂

恐らく9世紀頃には既にローマとコンスタンティノポリスの教会の間では徐々に無視できない差異が生じていたと考えられます。1054年にはローマとコンスタンティノポリスの間で相互破門を引き起こしていますが、これは決定的な大シスマではありません。1202年～1204年の第四回十字軍が本来の目的であるイエルサリム攻略を忘れ、ベネツィア商人等の商業的目的に置き換わり、攻撃目標がコンスタンティノポリスとなりました。西方教会の兵士達はローマ・カトリック教会を旗印としていたが、既に東西教会の差異は同じものとは思えない程度に乖離していたために、東方教会を真っ当なキリスト教と看做さなかったことが伺えます。そのためコンスタンティノポリスの教会に対する略奪・虐殺が行われました。これが東西教会の分裂を決定づけたできごとです。

使徒たちの時代の地中海世界では、多くの人々はラテン語とギリシア語の両方を理解することができました。これが、東西教会の一致性を確保するのに重要な役割を果たしていましたが、5～7世紀にかけて東西の人々は互いの言語を理解することができなくなっていました。このことは東西の分離を促進したのです。もはやローマを中心とした西側の人々はギリシア語を理解できず、ギリシア語を公用語とする東側のビザンツ帝国の人々はラテン語を理解できなくなってしまったのです。^{*21}

そして、もはやヨーロッパは一つではなく、二つの異なる文明圏が存在する状況となり、互いに互いのことを理解しようという者もほとんどいない状況が背景にあって、今日、東西の教会が一致し得ない重要な神学的问题が生じました。それが、「教皇権」と「フィリオクエ」です。

*21 「正教会入門」61, 62 ページ。

「フィリオクエ」は教会論的にも一致と多様性のバランスを崩す考え方であり、「教皇」はハリストスをその座から追いやり教皇という人間を座らせているというのが正教会側からの感想であり、到底受け入れることのできない思想として目に映ります。これには異論があるでしょう。しかし、東方の教会からは単なるローマの総主教であれば問題なかったが、全教会に及ぶ教会のかしらとして立てられているのは明白ですから、それはハリストスの座を追いやることに他ならないと受け止められます。

0.6 世界への拡大

0.6.1 地中海世界

教会が生まれた当時、地中海世界は概ねローマ帝国の支配下にありました。迫害の時代を乗り越えたハリストス教は、ローマ帝国において公認(313)され、後に国教化(392)されます。しかし395年にはローマ帝国は東西に分裂、5世紀頃に西のローマ帝国は滅びます。そして東に残ったローマ帝国は7世紀にはイスラム教勢力の台頭により徐々に領土を失い、最終的には15世紀のコンスタンティノポリス陥落で幕を閉じます。

0.6.2 アルメニアでの国教化

世界に先駆けてハリストス教を最初に国教とした国はアルメニアでした。『キリスト教の歴史 3 東方正教会・東方諸教会(宗教の世界史)』廣岡正久著によれば、組織化され制度化されたアルメニア教会が成立したのは314年のことです。後に第四全地公会で单性論側の立場をとったためカルケドン派からは分離した非カルケドン派の東方諸教会として歴史を歩むことになります。

0.6.3 ジョージアでの国教化

ジョージア^{*22}も4世紀中にはハリストス教を国教とした国でした。亞使徒聖ニノによる宣教の結果です。

ジョージア正教会は、世界のカルケドン派正教会の中では最も古い歴史を有しており、1世紀に使徒アンドレイによる宣教がはじまりであるとされています。更に4世紀には亞使徒聖ニノによってキリスト教化されています。

当時のジョージア国王ミリアン3世王でしたが、彼とその妃であり後に聖人となったナナ王妃といった王家の改宗が実現したのがおそらく334年、国教化を337年としている。ただしこれはキリスト教以外を禁止するものではなく、ゾロアスター教などの他宗教も国教として認められていました。

当初はアンティオキア教会の庇護下にありましたが5世紀後半から11世紀にかけてのどこかの時期に完全な独立教会としての地位を得ています。すくなくとも1010年にはアンティオキア教会から独立していますが、その後ジョージア国がロシア帝国に段階的に併合された関係でジョージア正教会も1811年から1917年までロシア正教会に併合されました。

ジョージアは1918年にロシアからの独立を宣言した後、1921年にソビエト連邦による侵攻で占領され、ソビエト連邦の一部となり宗教は禁止される期間までは、歴史の大半において国教でした。

最終的に独立教会としての地位は、1943年にモスクワ総主教庁から、1990年にコンスタンティノポリス総主教庁から承認されています。

ジョージア正教会は、同国において国民から信頼されており非常に大きな影響力を持っています。

^{*22} 以前はグルジアと呼ばれていた。

0.6.4 スラブ民族への宣教

9世紀半ば、スラブの教化、聖キリールと聖メフォディ兄弟の活躍。聖キリールは賢く多言語を解したがスラブ人には文字がなかったため宣教に支障をきたすと考え、キリル文字の原形となるグラゴール文字を考案しました。

これによってモラヴィア人、ブルガール人、セルビア人、ロシア人といった人々に宣教が行われることになります。

0.6.5 アフリカ

アフリカへの宣教は早い時期から始まっておりエジプトのアレクサンドリアを中心として宣教が行われました。それらが現代のコプト正教会やエチオピア正教会へとつながります。

0.6.6 西方世界

西方世界、西欧への宣教はもっぱらローマの教会の役割でした。476年、5世紀末には西ローマ帝国は滅亡し混沌とした社会状況の中、ローマ教会は唯一の統一的な組織として存在し続けます。旧西ローマ帝国内では政治的混乱が数世紀間続きますが、その中でローマ教会は次第に国家制度の機能を自ら引き受けるようになります。7世紀には教皇領が制定され、政治問題における教会の優越性、「両剣論」という思想が誕生します。世俗権力に対して教会の権利を力づけて主張するようになりました。そして、政治制度としてキリスト教徒の個人の生活を規制するようになります。^{*23}

東方の正教会の立場から眺めると、ルネサンスや啓蒙思想、革命運動は、世俗的な意味での自由の獲得を目指します。16世紀には宗教改革が起こり

*23 「自由と責任 調和を求めて」76、77ページ。

ますが、その後、自由を求める運動は神の前での道徳的責任を果たすという自由ではなく、人間の個人的な自由を絶対化するという極端に陥ったとみなされています。

ビザンツ帝国での政教調和

西側世界と異なり、東側世界では極端な政教分離政策は現れませんでした。6世紀中頃、ユスティニアヌス帝によるローマ法編纂の結果である新勅法第六号によると「国家と教会は価値を同じくする二つの神の賜物であり、國家の課題は社会生活において神の法を実現し、信仰を擁護することであり、一方教会は靈的問題に責任を持ち、國家がその機能を遂行することを支援するものです。教会と国家は一定の自律性と相互協力が同時に想定されていたのです」。^{*24}総主教は無力な人々のために執り成しをする特別の権限が与えられていましたし、国家権力を教会の権威によって均衡させるという規範、理念が常に存在していたのです。必ずしも理想通りにはいかなかったものの、このような理念、シンフォニアの神学というものが存在していた点は見逃してはならないところです。

0.6.7 グリゴリイ・パラマ論争

14世紀、アトスの修道士達は、絶え間ない祈りを通して神の光を見ることができる、神との眞の交わりを体験できると主張しました。これは大変な議論を引き起こしましたが、聖書と聖伝に照らし合わせると確かに可能であるというのです。これはすなわち、はかり知ることのできない神の本質と、その働き、エネルギーを区別することでした。

*24 「自由と責任 調和を求めて」77ページ。

0.6.8 コンスタンティノポリスの陥落

1453年、オスマン帝国の侵略によりコンスタンティノポリスがついに陥落し、ローマ帝国、即ち東ローマ帝国・ビザンツ帝国は滅亡しました。

0.6.9 近代ギリシア正教会の歴史

新約聖書中の記述から初代教会の頃からギリシアへの宣教は行われていたことがわかります。

聖使徒パウエルによってテサロニケ、フィリピ、コリントといった地域にできていたハリストイアニン達の共同体（教会）へ多数の書簡を送っています。

当時のギリシアの地域はローマ帝国領でしたのでローマ帝国、ビザンツ帝国の歴史とかぶるのですが、1453年にコンスタンティノポリスが陥落したことによってローマ帝国は完全に滅亡しました。

ギリシアの地域であるペロポネソス半島を含むバルカン半島、現在のトルコであるところのアナトリア半島付近で生活していたギリシア人つまり正教徒達は長い期間オスマン帝国の支配をうけることになりました。オスマン帝国はイスラム教でしたのでイスラム教以外の宗教にはミッレト制によって税金が課せられました。アギア・ソフィア大聖堂などは接收されモスクに改修されてしまいましたが、オスマン帝国領内の正教会自体は存続し、ギリシア人を中心に信仰が守られ続けます。

ながくオスマン帝国に支配されていたギリシア人たちは19世紀にギリシア独立戦争を起します。

ロシア帝国による「正教徒保護」の名目での南下政策によって、1853～1856年のクリミア戦争、1877～1878年の露土（ロシア・トルコ）戦争が発生し、エカチェリーナ2世がオスマン帝国内部におけるギリシア人の独立運

動を働きかけたことや、ヨーロッパ各地に離散していたギリシア人たちによるギリシア人としてのアイデンティティの目覚め、西欧諸国内に「ギリシア愛援主義」が起り独立運動への支援が活発化したことなどを背景に、1821～1827年にかけてギリシア人による反乱、ギリシア独立戦争が発生します。

これに先駆けてギリシア独立運動が盛んになっていたことからオスマン帝国スルタン、マフムト2世は独立運動を扇動しているという名目で時のコンスタンティノポリス総主教、グレゴリオス5世等を捕縛していました。実際にはグレゴリオス5世は独立運動を扇動しておらずむしろ沈静化を図ろうとしていたのにもかかわらず、マフムト2世は独立戦争発生の報復としてグレゴリオス5世等を処刑てしまいます。

結果的に1830年にギリシアはギリシア王国として独立します。

その後、第一次世界大戦(1914～1919)とギリシア・トルコ戦争(1919～1922)を経て1923年に締結されたローザンヌ条約によって、ギリシアおよびトルコの住民交換が行われます。住民交換は宗教によるもので、トルコ側からギリシア側へ約110万人のキリスト教徒(正教徒)が移住、ギリシア側からトルコ側へは約38万人のイスラム教徒が移住しました。この住民交換は強制的に行われたため様々な悲劇が生じたといいます。^{*25}

このような歴史的背景をもちながらギリシア正教会はアテネの大主教を長とした独立正教会として存続しています。教会として独立したのは1833年、コンスタンティノポリス総主教からの承認は1850年でした。

0.7 ロシア正教会の歴史

988年、ウラジーミル大公によるキエフ・ルーシーの洗礼。立場によっては989年と記されますが、教会的には988年と記憶します。

*25 世界史の窓「近代のギリシア(1) 独立と王政移行」
https://www.y-history.net/appendix/wh1201-047_1.html 2025年12月閲覧

修道士ネストルによって書かれたロシア最古の年代記『原初年代記』によれば、10世紀の末、キエフ・ルーシーを治めるウラジーミル大公は公国の国教を制定する必要から、イスラム教、ローマの教会、コンスタンティノポリスの教会に使節を送って調査させ、コンスタンティポリスのハリストス教が最も^{そうごん}莊厳で天にいるのかと思うほどであったという報告を受け、ウラジーミル大公はコンスタンティノポリスのハリストス教を受容することを選択したと伝えられています。伝承によればウラジーミル大公はハリストス教受容に伴い後宮を廃止したばかりでなく死刑制度を廃止したために犯罪が溢れ、宣教に来たエルリン（ギリシア）人の宣教師から諭され死刑制度を復活させたり、ハリストス教を国教とするにあたり全国民をドニエプル川に集め兵隊が囮んで川に突き落としその場で洗礼を施したなどの逸話が伝えられています。このキエフ・ルーシーの洗礼が歴史的に後々のロシア正教会の原点となっています。また、このウラジーミル大公の息子達のうち、ボリスとグレブの2人の兄弟は後に聖人に列聖されます。彼等兄弟は結果的には世継ぎ争いで死にますが、権力を争って戦うよりも無抵抗の死を選んだということで、ロシア人たちの感動を呼び起こしたのです。

0.7.1 タタールの輜

タタールの^{くびき}輜とよばれるモンゴル=タタールによるキエフ・ルーシーの支配は1240年から1480年までのおよそ2世紀にわたるものでした。キエフ・ルーシーがモンゴル=タタールの支配下に入ると、特に14世紀に入ってから力をつけてきたのがモスクワでした。1326年にはキエフからモスクワへ首座が移ることになります。

0.7.2 アレクサンドル・ネフスキー

13世紀、まだロシアは今ほど広大ではなかった時代です。^{たいこう}大侯ヤロスラフ二世の第二子だったアレクサンドル侯は、^{こう}モンゴル=タタールの侵略によつて弱体化したロシア諸侯を攻めようと迫るドイツ人とリトワニア人の勢力と戦うことになりました。スウェーデン王は大軍を起こしアレクサンドル侯のノヴゴロドを攻めようとします。アレクサンドル侯はネヴァの河口付近で敵よりも少ない戦力で戦い、敵を大いに破りました。この武勲からネヴァのアレクサンドル、アレクサンドル・ネフスキーという称号が与えられます。その後も氷上の戦いなどの勝利を重ねました。アレクサンドル・ネフスキーは戦いに勝利したことよりも、タタールに屈服し、服従することで様々な困難から国を救った功績こそ讃えられるべきです。そしてタタールの支配の中で、神品は神に仕えるものであるからタタールへの納税の義務の廃止を訴えこれを廃止し、タタール王の首府に正教の聖堂を建てる許可を得てタタール人へ正教を伝えようとさえします。1263年12月6日、44歳で永眠しました。^{*26}

聖アレクサンドル・ネフスキーが西方の敵に激しく抵抗し、タタールの支配を受け入れたのには宗教的な理由もありました。当時、モンゴル=タタールが宗教に寛容だったのに対し、ローマ・カトリック教会を旗印とする西方の敵は、東方の正教を異端と見做して根絶やしにしローマ教皇の権威の前に服せざるという目的を公然と掲げていました。^{*27}第四回十字軍がコンスタンティノポリスを占領し有名無実のラテン帝国(1204~61)を建国するなど、時代背景を考えると正教を奉じるルーシー達にとってはモンゴルとの融和は当然の選択だったと言えるでしょう。

*26 「諸聖略伝 十二月」33ページ。

*27 「宗教の世界史 10 キリスト教の歴史 3 東方正教会・東方諸教会」廣岡正久著、山川出版社。110ページ。

0.7.3 ラドネジの聖セルギイ

セルギイは人里離れた森の中で修道生活を始め、その評判を聞きつけ他の修道者達が集まり、徐々に規模を拡大し、大修道院へと発展しました。このようなプロセスは当時のロシアで起こっていた新しい文明社会の前進といえるべきことで、人里から離れたところへ修道士が集まり開拓し修道院が拓かれ門前町が生まれる、すると新たな修行の場を求めて荒野へ進出するという循環が起きたのです。^{*28}

14世紀に入るとイスラムに改宗していたタタールの政策は宗教的には寛容ではなくなっていました。すなわち、この戦いの敗北は教会の破壊とキリスト教徒への弾圧、ロシア人への虐殺がおこなわれることを意味しました。このような時代背景にあってセルギイは全ロシアを代表する修道士として^{すうけい}崇敬を集め皆の精神的支柱となっていたのです。

1380年8月18日、モスクワ大公ディミトリイは、戦いに先立ち、セルギイに会うためにラドネジの修道院を訪れます。セルギイはディミトリイに戦いの勝利を預言します。1380年9月8日、クリコヴォにおいてモンゴル=タタールの40万の軍に対してロシアの軍はセルギイの預言通り勝利をおさめます。この勝利によって大公ディミトリイはディミトリイ・ドンスコイ(ドン川のディミトリイ)と呼ばれるようになります。

タタールの支配がこの戦いのみによって終わったわけではありませんが、この勝利は決して小さなものではありませんでした。

0.7.4 第三のローマ=モスクワ

第二のローマであるコンスタンティノポリスがイスラム勢力の台頭に伴い急速に力を失いつつあるとき、モスクワはその存在感を増して行きます。そ

*28 「キリスト教の歴史 3 東方正教会・東方諸教会」119 ページ。

の過程で 15 世紀から 16 世紀にかけて現れたモスクワを第三のローマとみなす思想でした。

0.7.5 所有派と非所有派

第三のローマという思想が生まれたのとほぼ同じ時代に、ロシアにおいて、教会が大きくなると、積極的に財産を保有し管理し社会に貢献するべきであるという所有派と呼ばれる考え方と、教会は清貧であるべきとし、財産の保有を求める非所有派と呼ばれる考え方のグループに分かれて論議が繰り返されました。結局ロシア教会の歴史を先導することになったのは所有派でしたが、非所有派の思想も否定されることなく修道士達の間で受け継がれてゆきました。

0.7.6 ニーコンの改革と古儀式派の派生

教会内の改革を強引に進めると、「ニーコンの改革になつてはいけない」と言ったフレーズが屢々聞かれます。^{しばしば}17世紀ロシア教会において、ニーコンは強引に改革を推し進めたために、古儀式派と呼ばれるグループの分裂を招いたと考えられていました。しかしながら近年の研究によれば、それほど単純な話ではなく、教会の代表である総主教が世俗権力を獲得し、皇帝代理のような立場になってしまっていたことが問題だったことが明らかになります。これはビザンツ帝国における国家と教会のバランスの良い関係を否定するものだったのです。

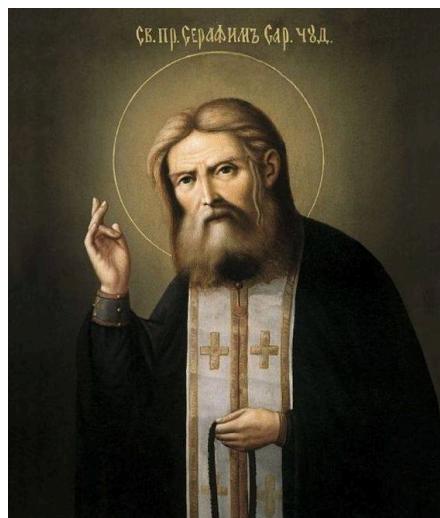
0.7.7 アンチハリストスのピョートル大帝

17世紀のニーコンの改革の問題点は、単に強引に改革を推し進めたことではなく、教会が世俗権力を掌握し、国家権力を利用して改革を推し進めようとした点でした。この反動として現れたのが 17世紀の終わりから 18世

紀にかけてのピョートル大帝によるロシアの西欧化でした。ピョートル大帝は西欧の進んだ文明を取り入れるべく奮闘したばかりでなく、ドイツを参考に、教会が国家の一機関として機能するように、つまり対等なバランスの良い関係ではなく、教会は完全に国家に従属するべきであるという、いわばニーコン総主教のような存在を再び許してはいけないという考えに基づき、総主教制を廃止してしまいます。これは教会の伝統を全く顧みない反キリスト的な政策でした。

0.7.8 サロフの聖セラフィム

ラドネジの聖セルギイに並ぶ、ロシアで最も崇敬される聖人が 18 世紀から 19 世紀にかけて活躍したサロフの聖セラフィムです。



サロフの聖セラフィム

0.7.9 革命

1917 年、ウラジーミル・レーニン率いるボリシェヴィキによる革命によって帝政ロシアは倒されます。帝制ロシアへの反発から生まれたボリシェヴィ

キ政権は当初、総主教制を廃止したピョートル大帝以来の宗務局制度を白紙に戻します。これは教会にとっては総主教制の復活という念願がかなう、歓迎すべきできごとでした。

0.7.10 大迫害の時代

レーニン率いるボリシェヴィキ政権はソヴィエト連邦を成立させます。そして直ちに教会への迫害を開始します。この迫害には厳しい時もあれば緩やかな時期もありました。当初は全く宗教を絶滅するという目的のために激しい迫害が行われましたが、第二次世界大戦下において、ドイツの侵略から国家を防衛するための団結にはロシア正教会の協力を得なければならないというスターリンの判断によって教会は存続が認められたのです。しかし、信者達の生活は厳しく制限され、「教会の『きよ』の字を言っただけでも収容所送り」と伝えられる程です。あるいは老人が教会に入る時は黙認するが若者が教会に入ろうとするとそれを妨げるスーツ姿の大男がいたという目撃情報もあります。教会は宗教博物館という名目で存続が許されていたので聖職者は「我々は宗教という愚かなことを信じていたことを人々に伝えるためにいるのだ」と言わされていたのです。司祭等は恐怖心から本当に伝えたいことを言えないという状況にありました。子供達には党員が視察に来る日には首に十字架をかけて来ないようにと指導していました。それでも秘密裏に共産党員が洗礼を受けに来るという事例もありましたから、国民の信仰心を根絶やしにすることは不可能でした。

0.7.11 ペレストロイカとソヴィエト連邦の崩壊

70年に渡り苛烈な迫害と黙認の歴史を繰り返してきたソヴィエト連邦は1991年、ついに崩壊します。崩壊前の1988年にはロシアのキリスト教受容1000年祭が盛大に祝われるという、かつてのソヴィエトでは考えられない

のような状況が生まれていました。

0.7.12 近年

ロシア正教会は 70 年に渡るソヴィエト政権下の迫害を生き抜き、息を吹き返します。それまで「教会の『きょ』の字を言っただけで収容所に送られる」状況は一変しました。しかし、これは同時に鉄の壁に守られていた時代が終わり、西欧米のグローバリズム、自由主義思想^{*29}の流入を許すことになります。自由主義思想は伝統的なキリスト（ハリストス）教とは相いれない思想です。この文明の衝突は全世界で発生しておりロシア正教会モスクワ総主教キリールは自由主義思想とは違う、伝統的宗教的価値観と共に存可能な世界秩序の構築が必要と語っています。

0.8 日本への宣教

0.8.1 黎明期

19 世紀半ば、ロシアのスモレンスク県ベリヨスキ郡ベリヨーザ村出身のイワン・カサートキンはペテルブルク神学大学の学生でしたが、彼は開港したばかりの函館のロシア領事館付司祭の公募に修道司祭として応募し、修道名ニコライとなり神学大学を繰上げ卒業し、1861 年、当時 25 歳のニコライは函館に到着しました。最初から宣教の志を持っていたニコライは日本に到着してただちに日本語の猛勉強を始め、古事記や日本書紀に親しみました。

*29 自由主義思想と書かれてはいるが実際は新マルクス主義つまり社会主義と伝統的宗教の衝突との見方もあるが実際のところどうなのか筆者には判断がつかない。

0.8.2 初穂

最初に獲得した信者は坂本龍馬の従兄弟にあたる沢辺琢磨を含む三人でした。沢辺はこの後、日本人初の正教会司祭となります。

0.8.3 資金集めの苦労

ニコライは度々ロシアに帰国しては宣教資金を集めることに苦心しました。また宣教の助け手を求めたがなかなか希望はかなわず、結局、日本の正教会の宣教団は、外国人はおよそニコライひとりだけで、実際は日本人の伝教者の手によって北海道から東北、関東、西日本に向かって宣教が行われ、教勢を伸ばします。特に北日本においては士族を中心に受け入れられ士族の宗教となって行きました。1891年には東京復活大聖堂が竣工。その後、通称ニコライ堂として親しまれることになります。

0.8.4 露探と呼ばれた時代

1904～1905年の日露戦争では帰国勧告を受け入れず、日本人信徒達を支えるために日本にと留まりました。日露戦争当時、日本人正教徒達はロシアのスパイ、露探といつて迫害される事例が多くありました。

0.8.5 ニコライ永眠

ロシア経由でニコライによってもたらされたハリストス正教会は明治期の最盛期には信徒数3万を超えるまでに成長しました。1912年2月16日、大主教ニコライは永眠しました。

0.8.6 大正から昭和にかけての激動の時代

ニコライの後を継いだのはセルギイ・チホミーロフ府主教でした。1917年にはロシア革命が起こりロシア帝国から日本宣教団への送金が停止されることになり教勢を落とすことになります。1923年、関東大震災。ニコライ堂の鐘樓^{しょうろう}が崩れドームを崩壊させ火災となり全てを失うことになりますが、全国からの寄付を募り1929年に修復工事が完了しました。

1936年、日中戦争。1941年太平洋戦争。この時代は悪化する日ソ外交の煽りで日本ハリストス正教会は世間からの偏見を蒙ります。また外国人が宗教団体の長となってはならないという法律が施行されたためセルギイ府主教はその座を追われることになりました。日ソ不可侵条約を無効としたソ連が侵攻を開始したことが原因ではないかと考えられるのですが、セルギイ府主教は特高警察に逮捕監禁され40日間に渡る拷問の末、帰宅を許されたものの衰弱のため、1945年8月10日、終戦を目前に永眠しました。

0.8.7 敗戦後アメリカ正教会への編入と冷戦

1945年8月15日、敗戦。それに伴いGHQの監督のもと、「日本ハリストス正教会」はアメリカ正教会の傘下に入り、アメリカ人主教を迎えることとなります。この時、モスクワ総主教庁との関係を維持すべきであるとするグループが「日本正教会」として分離し対立、混迷を深めました。この頃には多くの信者が離散し大幅に規模を縮小しました。米ソ冷戦の時代には共産主義との関係を疑われやはり偏見を蒙っていたのです。

0.8.8 聖自治日本正教会の発足

1970年、日本ハリストス正教会は自治教会となりました。これはアメリカ正教会がモスクワ総主教庁から完全に独立するためのアメリカとモスクワ

の協議の結果です。アメリカ正教会に独立のトモス（独立承認のための文書）を付与する際の条件として日本教会をモスクワの庇護下に返還すること、そして日本ハリストス正教会を自治教会とすることが決定されました。そして分離していた「日本正教会」をロシア正教会の直轄とする決定がなされます。これが現在のロシア正教会モスクワ総主教府駐日ポドヴォリエ（目黒・駒込）です。日本ハリストス正教会はこの時、自治教会となって初の邦人主教を得ました。フェオドシイ永島府主教です。フェオドシイ府主教は、司祭らがほぼ無給であったことから給与体系等待遇面を整備しました。

0.8.9 ソヴィエト連邦崩壊は氷解の兆しか

1991年、無神論国家ソヴィエト連邦が崩壊。これによってロシア正教会の復興が進むことになります。フェオドシイ永島府主教は1999年5月7日に永眠。その後、2023年8月、ロシアによるウクライナ侵攻という悲劇が起こる^{さなか}真下、日本正教会はダニイル主代府主教座下の永眠により、新たな首席主教としてセラフィム府主教の時代を迎えています。

現在の教勢は1万人弱であり、明治期の最盛期に比し三分の一程度にまで落ち込んでいますが、今は私達の時代です。楽しみましょう。

0.9 おわりに

これで「解説ハリストス教信仰 (II)」はおわりです。

0.9.1 編集履歴

解説ハリストス教信仰 (II)

v1.0 . . . 2023.08.26

v2.0 . . . 2024.06.24

v3.0 . . . 2025.12.29

v3.2 . . . 2026.1.3

この文書の最新版は下記 URL を参照してください。

<https://orthodox.jp/eks/>

0.9.2 製作・著作

エフレム木村真之介 (E.Kimura.S)

連絡先

X(Twitter): @shin314159

e-mail: shin314@gmail.com